
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 299

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.860 批判的实在論への賛歌_ A Paean for Critical Realism

目次

- 5961. フランクフルト学派と批判理論:オットー・ラスキー博士との縁がもたらしたもの
- 5962. 同様の体験と問題意識を持った人々:断絶の時代を乗り越えて
- 5963. キャロル・ギリガンの言葉より:知ること・実践すること・在ること
- 5964. 渇きを癒す読書の再開
- 5965. 今朝方の夢
- 5966. 社会との協創によって実現される発達と「発達」という暴力:ヴィゴツキー、ピアジェ、
ハーバマスの観点より
- 5967. 発達の「組織化」と「適応」
- 5968. 芸術と社会の対話的關係性の構築に向けて
- 5969. 今朝方の夢
- 5970. 学習・発達と感情的側面:発達のエルゴード性と非エルゴード性
- 5971. 自分の名前に導かれて:自己涵養的・社会実践的なリテラシーの未熟さ
- 5972. 自由と発達
- 5973. 今朝方の夢
- 5974. 新たな眼差しで胸を高鳴らせて日々を生きること
- 5975. 現代を覆う全象限的な盲目病の治癒に向けて
- 5976. 今朝方の夢
- 5977. シャドワークの確かな進展:フラットランドの進行と一次元的人間の蔓延
- 5978. 本日の雑多な考え事
- 5979. 文明による抑圧とバイオパワーによる規定
- 5980. 本日の中土井遼さんとの対談によって紐解いていただいたもの

今日は朝から小雨が降っていて、今は少し雨脚が強くなっている。今日も気温がめっきり下がり、室内では真冬の時と同じ格好をして過ごしている。今日は靴下も履いているほどだ。

昨日、インドのある大学が提供している社会学のオンライン講義で面白いものを見つけた。ちょうど今の私は、ロイ・バスカーやヨルゲン・ハーバマスの思想体系に関心を持っていて、その講義ではハーバマスの理論が扱われていた。それを聞きながらふと、私が過去に師事していたオットー・ラスキー博士がどういう意味で「弁証法思考」という言葉を使っていたのかが明瞭になったのである。端的には、これまで私が気づいていなかった弁証法的思考の側面を見出したと言っていいかもしれない。

ハーバマスは現在91歳であり、ラスキー博士は84歳と年が近く、2人ともテオドル・アドルノとマックス・ホルクハイマーに師事をしており、フランクフルト学派の第2世代に該当する。ラスキー博士のもとで学んでいた時には、発達心理学をラスキー博士から学ぶことで手一杯であったため、ラスキー博士が時々言及するフランクフルト学派の思想にまで探究の手が回らなかった。

先ほどインドのその大学が提供するオンライン講義を聞いていた時に、フランクフルト学派が提唱した批判理論(critical theory)というものが実に弁証法的な理論体系だと思ったのである。それまでの社会学は基本的に、社会を動かすメカニズムや法則を客観的に記述することのみに注力していた。つまり、そこに規範的(normative)な側面はなく、社会はどのようにあるべきか、社会の正義や幸福をどのように実現させていくべきかなどの議論は基本的になかったのである。その問題を指摘し、社会学の客観的側面と規範的側面という対極を行き来する形で理論的・実践的探究を志したのが批判理論なのだということに気づいたのである。そこから私は、改めてこの批判理論を深く学びたいと思った。

本棚にはアドルノやホルハイマーの書籍が何冊かあるのだが、これまではあまり深くそれらの書籍を読んでいなかった。何よりも、自分自身が社会の規範的な側面に分け入って思想的な探究をするというような段階に至っていなかったと言った方が正確かもしれない。それが今、実践霊性学や実践美学の探究を始めたことに現れているように、この現実世界の課題と真摯に対峙し、実践的な思

想的探究を行い始めている自分がいる。批判理論を学ぶ時期がようやく自分に訪れたのだと知る。アテネ旅行までに届く14冊のロイ・バスカー関連の書籍もそうした時期の訪れを伝えている。手持ちのハーバマスの書籍に飽き足らず、来月はさらに何冊かハーバマスの書籍を購入しようと思う。フ
ローニンゲン:2020/7/5(日)10:46

5962. 同様の体験と問題意識を持った人々:断絶の時代を乗り越えて

時刻は昼の12時半を迎え、朝から降っていた雨がひと段落した。天気予報を見ると、ここからはもう雨が降らないらしい。

今日の午前中は、いつものように創作活動と読書を往復していた。このところはこの往復運動がより良い関係になっており、お互いがお互いに良い影響を与えていることを実感する。この往復運動の中にいると、いつの間にか1日が終わりに近づいているという感じなのだ。

午前中の読書においては、引き続きルーマニアの社会心理学者セルジュ・モスコヴィツシの“The Age of the Crowd: A Historical Treatise on Mass Psychology (1985)”を読み進めたり、ハーバマスやマルクーゼの書籍をパラパラと眺めていた。そのような形で読書を進めていると、自分が共鳴する思想家や芸術家にはある共通点があることに気づいた。彼らの生い立ちや活動の背景にあるコンテキストを眺めてみると、彼らは人生のどこかで—多くの場合には幼少期や青年期の頃—、社会的な阻害、ないしは虐げられた体験をしているということだった。

そして彼らは、そうした体験を個人的な憤りに留めるのではなく、社会の風潮や制度的な歪みに対する憤りとして、それを是正することに尽力する形で自らの思想を育んだり、芸術作品の創作に進進する共通点があることに気づいたのである。端的には、彼らは社会が課した抑圧的な体験をもとに、社会的正義や公平さ、さらには社会的な幸福の実現へ向けて自らの活動に専心したという特徴がある。

そうした彼らの共通点と自分自身を自ずから重ねてしまう自分がいる。おそらく彼らと共通する体験と問題意識があるからこそ、今の自分は日々の探究や実践を行っているのだろう。そのようなことを考えた後に、大企業が支配的な力を持つ金融資本主義が席卷するこの現代社会の中において

は、人間の商品化は生まれた時から始まっているのではないかと思った。いや下手をすると、生まれる前から始まっていると言えるかもしれない——例：出生前の胎児の教育など——。

大企業を中心に据えた大規模な商品とサービスの流通とそれに付随する大規模な広告宣伝によって、人は生まれながらにして商品化の道を歩んでいるのではないかと思われるような現状が見えてくる。このテーマについて考えていると、ハーバマスが提起していた物質の生成と意味の生成が分断されてしまった現代社会についても考えを巡らさざるを得ない。

私たちはいつの間にか、物質と意味を分離させ、物質は物質として形骸化の道を辿り、意味は意味として形骸化の道を辿っているように思えてならない。つまり、物質はそれが大量に生産されることによって、ますます物質的な価値を希薄化させ、意味の領域に関しては、意味が物質世界に還元される・吸引されることによって、意味の世界がより貧弱なものになって来てしまっているのではないかということだ。

ふと、書斎の机の上に置かれているカレンダーに目を向けた。このカレンダーは1つの物質なのだが、本来はそこに文化的な意味が内包されていたはずである。ところがそれは今やもう、文化的に豊かなものを伝える機能を喪失し、単に日付を伝える存在に成り下がってしまっている。ここにも物質と意味の断絶化を見ることができる。現代という時代は本当に分断の時代なのだと思う。これまで自分が探究してきた成人発達理論やインテグラル理論、そして現在の最大の関心事項である実践霊性学や実践美学は、そうした断絶を乗り越えるために活用されていく必要がある。フローニンゲン：2020/7/5(日)12:57

5963. キャロル・ギリガンの言葉より：知ること・実践すること・在ること

時刻は午後7時半に近づいて来ている。今日は小雨が断続的に降る1日であったが、夕方この時間帯は雨が止み、西の空には夕日が見える。明日も午前中には雨が降るようだが、夕方からは天気が回復するようなので、それを見計って近所のスーパーに買い物に行こうかと思う。

午後に仮眠を取っている最中に見たビジョンの断片を覚えている。ビジョンの中で私は、前職時代に部署は異なるがお世話になっていた方が運転する車の中にいた。その方は、新車を購入したらしく、車内は綺麗であり、新車の香りが漂ってくるかのようだった。私たちがどこに向かっているのか

わからなかったが、道は一本道であり、通りの両脇にはポプラの木が植えられていて、木々の葉からは木漏れ日が漏れていた。

その方はその道に慣れているらしく、手放し運転をしていたのだが、もし何か道路に突然飛び出して来たら大丈夫なのだろうか心配になっていたことを覚えている。そのようなビジョンを見た後に、午後からの活動に取り掛かり始めた。

このところは自分の関心領域に関連した哲学書を読むことが多く、そこでふと、発達心理学者のキャロル・ギリガンの言葉を思い出した。ギリガンはかつて博士課程の教え子に対して、「どんな探究領域・実践領域も突き詰めていけば、必ず哲学的な領域に触れる」という類の言葉かけをしていたそう。それは至言である。今の私も、人間発達や芸術に関して、様々な領域の哲学思想を学びながらその理解を深め、この社会に関与していく実践の道を見出そうとしている。

知ること、実践すること、在ること。それらの繋がりについて改めて考えている。本日偶然知ったのだが、ヘブライ語においては、knowingとdoingに違いがないとのことだった。知ることも1つの実践であることに他ならず、そこには言行一致の精神を示唆するものがあるように思える。さらには、何か行動をしなければ本当に知ることなどできないはしないことも示しているように思えてくる。

知ることは実践することであり、実践することは知ることだ。それは実践領域に対して新たなことを知ることだけを意味しているのではなく、実践をする自己及び自己を取り巻く社会を知ることでもある。そして新たに開示された自己と社会の側面をもとに、再び実践に従事していく。そのような円環運動を見る。また、知ることと実践することは在ることを変えていく。実践をし、認識が変われば、存在も変わるのだ。ここにもまた認識論と存在論の相互依存的な関係を見て取ることができる。

知ることと実践することは在ることを変え、在ることが変われば知ることと実践が変わっていく。とても面白い関係がここにある。こうした新たな認識が生まれたのも、今この瞬間に書くという実践をしたからであって、書くという実践を通じて新たな認識世界が開かれ、その認識世界に自己を新たに置いたからなのだろう——存在がそこに導かれたという感覚の方が正確か——。

夕方の静かな世界を眺めながら、平穏な心で今日を締めくくることができそう。フローニンゲン：

2020/7/5(日) 19:35

時刻は午前5時半を迎えた。早朝に降っていた小雨が一旦落ち着き、今は平穏な世界が広がっている。とはいえ今日は断続的に小雨が降るようだ。また、気温に関してはかなり寒さを感じる。ここ最近では真冬の時とほとんど同じ格好をして室内で過ごしている。今もまさにそうだ。換気のために開けている窓も、もう少ししたら閉める必要があるほどに寒い。

ここ最近ではまた日記の執筆量が増えている。それは読書のおかげだろう。少し前に意図的に書物から離れ、それによって書に対するある種の飢餓感が生まれてきていた。今、再び旺盛な読書をすることによって、その渴きを癒している自分がある。書から離れたり、書に接近したりという良い循環が流れていて、現在は書物と向き合うフェーズにある。毎日自分の関心領域に関する思想書を読むことによって、対象に対する理解が深まり、それによって実践がより豊かなものになっているのを実感する。まさにknowingがdoingを変え、そしてbeingを変えてくれていることを実感している。

しばらく前に、書斎の机の右の一角に書籍を積んでおくことをやめていたのだが、昨日からまた書物を積んでおくことにした。それらは、これから読みたいと思っている書籍たちである。再読の書籍も含めて、今はテオドール・アドルノ、マックス・ホルクハイマー、ニコラス・ルーマン、ヨルゲン・ハーバマス、エリッヒ・フロム、アーネスト・ベッカー、ハーバート・マルクーゼ、ザカリー・スタインの書籍などが積まれている。そうした思想書に合わせて、科学書としては、カート・フィッシャー教授の追悼論文集が積まれている。今週末に知人とオンライン対談をさせていただくことになっており、それに向けていくつか書籍を読んでおきたい。積まれている書籍の全てに目を通すことはできないだろうが、できる限り目を通しておこう。

今日は、ルーマニアの社会心理学者セルジュ・モスコヴィツシの“The Age of the Crowd: A Historical Treatise on Mass Psychology (1985)”の続きを読む。字が細かく、400ページほどの分量を持ち、内容としても密度がある本書を1日で読むことができず、結局数日間ほどかかった。初読は本日の午前中に終わる予定だ。群衆心理学について学ぶ際に、この書籍は核となる文献になるだろう。本書の中で引用されていたいくつかの書籍を別途購入したいと考えており、その時には群衆心理学の創始者とも言えるグスタフ・ル・ボンの“The Crowd: A Study of the Popular Mind (1895)”を購入しよう。出版年は随分古いですが、現代においても得るものが非常に多いだろう。

読書に並行して、今日もまたいつものように創作活動に励んでいく。社会で大規模に進行する人間の同質化や画一化に抗う意味での創作活動。創作活動は、自己の固有性の発見と維持・涵養につながり、それが群衆化の対抗手段になりはしないだろうか。創作活動を通じて、未熟な群衆に墮すことを防ぎ、一方でより成熟した群衆へと向かっていく道はないだろうか。それぞれが固有な存在としての自己を維持しながら、それでいて個人が分断されずに自律的な有機体としての集合を形成していく。そのような姿をぼんやりと頭に描く。フローニンゲン:2020/7/6(月)06:06

5965. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今、フローニンゲン上空の空は薄い雲ので覆われている。それは雨を降らせるような雲ではないが、天気予報によると、昼前から再び小雨が降り始めるようだ。

それでは早速今朝方の夢について振り返り、今日の活動に入っていきたい。夢の中で私は、小中高時代の女性友達(MK)と一緒に、田舎の山奥で塾を経営することになっていた。それは彼女からの提案であって、その土地には塾のようなものは一切なく、学校の授業を補完する形で教育を担う場があってもいいかと思ったので、私は特に深く考えずに彼女の提案に乗った。

早速彼女と一緒に塾のある場所に車で向かうことにした。時間は夜の時間であり、辺りは随分と暗かった。彼女が車を運転してくれており、道中、塾に関する話を聞いた。先生は一体何名いるのかということを探ねたら、先生は私だけとのことだった。それでは彼女は何をするのかといえば、事務作業をするとのことだった。

田舎とは言え、仮に生徒が多く集まって来たら、1人で全ての生徒を受け持てるかどうか懸念があった。私は英語と数学を担当することになっており、学年は小学校から高校までと幅が広がった。全ての生徒を受け持てるのか懸念があったが、私は彼女に、数学に関しては予習など一切せず、その場で問題を解くということを伝えた。すると、彼女は驚いた表情を浮かべており、それで本当に大丈夫なのかどうかを聞いて来た。確かに私は数学が好きであり、以前に数学の講師として働いていたこともあるのだが、むしろその場でいかなる問題にも対応できそうなのは数学ではなく英語の方だった。そうしたことから、自分が述べた発言を訂正したい気持ちになったが、それを訂正しようとする前に、塾の近くの駐車場にやって来た。

駐車場に車を止めて車から降りると、辺りに塾の建物は見当たらなかった。彼女に塾の場所を聞くと、そこから牧場を通り抜けた先にあるとのことだった。すごい場所にあるな、と私は思ったが、長閑な牧場を眺めながら塾に向かうのも悪くないと思った。彼女は何か雑務があるようであり、先に塾の校舎に向かうとのことであり、足早に牧場を進んで行った。私はゆっくりと景色を眺めながら歩いていた。

すると、牧場の一角に危険地域のような場所があり、塾に行くためにはそこを超えていく必要があるようだった。そこは鉄線のようなもので囲まれていて、看板には獰猛な動物が出現するので注意せよということが書かれていた。どうやら、狼や虎などの獰猛な動物がそこに出没するらしかった。私は恐る恐るフェンスに近づき、そこからは宙に浮かんで空を飛んでいくことにした。しかし、フェンス越しにはすでに獰猛な動物たちの姿が見えており、結局フェンスを越えていくことにためらいの気持ちが生じて、私は慌てて引き返すことにした。彼女には申し訳ないことをしたが、塾ではもう働けないと思った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は実際に通っていた小学校の体育館にいた。そこはとても綺麗な体育館であって、私が高学年になったときに新しくなったものだ。体育の授業の一環として、当初は体育館の中でみんなとフットサルをするはずだったのだが、フットサル用のボールがないとのことであり、そうであればバスケをしたいと思った。しかし、バスケットボールもないということが判明し、多くの生徒たちはバレーを始めた。

最初私も渋々バレーに加わったが、やはり自分が行きたいのはフットサルかバスケだったので、自分のところにバレーのボールが来た時に、それを思いっきり天井に向かって蹴り上げた。すると、ある友人がそれはバレーのルールに反すると述べ、私はそれを承知でボールを蹴り上げていたのだが、その行動を持ってして、私はバレーをするのをやめた。

体育館の外を眺めてみると、何人かの女性友達たちがバスケをしている姿が目に入った。「なんだ、外であればバスケができるのか」と思い、私はすぐに外に駆け出していった。そこにはちょうど、数人ほど男性友達もいたので、彼らを交えて、3on3をすることを女性友達に提案した。ところが、その男性友達の中に1人、体臭がきつい友達がいて、彼女たちは彼が加わることを嫌がっているよう

だった。仕方ないので、彼とマッチアップするのは自分だと説得すると、彼女たちはそれを了承し、ようやくバスケができることになった。今朝方はそのような夢を見ていた。

最初の夢においては、牧場のような場所から飛んで逃げるときに速度が尋常ではないほどに早かったのを覚えている。また、逃げ出した先にも印象的な光景が広がっていたように思うのだが、それについては細部が思い出せない。フローニンゲン:2020/7/6(月)06:32

5966. 社会との協創によって実現される発達と「発達」という暴力:ヴィゴツキー、ピアジェ、
ハーバマスの観点より

時刻は午後4時に近づこうとしている。今、空は晴れていて、太陽の姿を拝むことができている。

先ほど、改めてカート・フィッシャー教授の追悼論文集“Handbook of Integrative Developmental Science (2020)”を読んでいると、色々と考えさせられることがあった。それらについて備忘録がてらまとめておこうと思う。まず1つには、ヴィゴツキーとピアジェの発達思想と関連づける形で、発達現象に伴う規範的側面について触れておきたい。教育哲学者のザカリー・スタインが指摘しているように、「発達」という言葉には、科学的な記述的側面と、価値的な規範的側面に関する二重の意味が絶えず内包されている。とりわけ後者について、どうして発達という言葉に絶えず規範的側面が付き纏っているのかについて考えていた。この点についてはすでに数日前の日記にも書き留めたが、新たな観点を与えてくれたのが、ヴィゴツキーとピアジェの発達思想だった。

ヴィゴツキーが強調するように、発達とは様々な種類における社会的な協働作業によって実現していくものであり、この点については、ピアジェも「相互承認」を通じた発達という考え方を採用している。またそもそも、社会というものが規範的な行動や規範的規則によって構成されており、私たちは社会のそうした側面に絶えず触れながら、そして絶えず影響を受けながら生きることを通して発達を遂げていくのだから、発達には絶えず規範的な側面が伴うというのは当然と言えば当然だろう。

であればここで、健全な発達の形というものも見えてくるのではないかと思う。以前、成人発達理論とインテグラル理論に造詣の深い知人とやり取りをさせていただく中で、「高度な発達を遂げた人というのは、単に複雑な思考ができるだけではなく、この社会の文化や制度に内包された構造的な

問題に自ずと関心を持つはずなのではないか？」というような投げかけをしていただいたのを覚えている。この指摘は正鵠を射たものだと改めて思う。

ヴィゴツキーやピアジェが指摘するように、人間の発達というものが、本来社会との協創によって成し遂げられるものを考えると、健全な発達を遂げていくというのは、絶えず社会課題を内在化 (internalization) させていくという側面があるはずである。もちろんながら、発達には多様な領域があり、全ての発達領域における発達が社会課題を内在化させる形で進んでいくわけではないが——実際には、社会的な生き物である人間が携わる全ての学習・実践領域は必ずどこかで社会と接しているものだと思うが——、今私たちが直面している社会の課題を乗り越えていくために必要な発達というのは、多分に上述の要素を持ったものなのだと思う。

また、高次元な発達について議論していく際には、ハーバマスが指摘するように、高次元の発達段階がいかような思考内容・行動内容を持つのかについて、絶えずリアリティチェックをする必要があるだろう。生粋の発達科学者の多くがケン・ウィルバーの発達モデルをほとんど参考にしていないのは、ウィルバーはもちろん非常に優れた発達モデルを提唱しているのだが、とりわけウィルバーが提唱する高次元の発達段階というものが、サンプル数の少なさゆえに、それらの段階にある人々が現代社会の具体的な状況及び課題に対してどのように思考し、どのように行動するのかが明確ではないことが挙げられる。

人間発達に関する知識を積み上げていく際には、リアリティチェックを怠ることなく、そしてそれを発達に関する議論や実践に規範的な形でフィードバックをしていく必要があるのではないかと思う。こうしたリアリティチェックとフィードバックを怠り、発達の科学的な記述的側面だけを取り出して発達について議論や実践をしていくことはおかしな方向に私たちを導いてしまうだろう。

またそもそも「発達」という言葉が、先進国のエリートたちが生み出した構成概念 (construct) に過ぎない点も忘れてはならない。言い換えれば、この地球上には発達などという言葉に気にせずとも、あるいは社会経済的・文化的に発達という言葉と無縁な形で存在している人々や地域が存在しており——そうした人々や組織は先進国にも当然ながら存在している——、そうした人々や地域に対して発達という言葉を押し付けるのは、別種の暴力ではないかと思う。

発達という言葉が地球の隅々で志向対象 (orientation) になれば、発達をめぐって協創ではなく競争が後を絶たず、発達という言葉が嗜好対象 (preference) になれば、発達という現象は単なる消費対象に成り果ててしまうだろう。その結果として、人間は高度な発達に向かうことを絶えず煽られる形で生きる消費的な生き物に成り下がってしまい、この社会はそうした消費的生き物の集合になってしまうのではないかと思う。この世界が維持存続していくためには、多様性が不可欠であり、そうした多様性を確保するためには、発達を希求するゲームとはそもそも無縁な人々や集団、あるいはそうしたゲームから降りる意思表示をした人々や集団に対して、発達及び「発達」という言葉を強要する暴力は避けなければならないことである。フローニンゲン:2020/7/6(月)16:39

5967. 発達の「組織化」と「適応」

時刻は午後7時半を迎えようとしている。つい先ほど夕食を摂り終えて、再び書斎に戻ってきた。ここから少しばかり作曲実践をし、就寝前には絵をいくつか描きたいと思う。今日もまた創作活動と読書に打ち込む充実した1日だった。平穏な環境の中で、落ち着いて自分の取り組みに取り組めることを本当に感謝しよう。今日も読書を通じて色々な気づきを得ることができ、自分の考えを少しばかり前進させることができた。読書が本当に良い刺激と養分になっている。

ある対象について知ろうとするとき、知るという行為は無限に深まるものなのだから、知ることの限界に対して不必要に気にかけることはない。仮にある対象について知ったことに確証を持たず、絶えず懐疑が付き纏うのであれば、それは「デカルト的不安 (Cartesian uneasiness)」と呼ばれる現象を患っているかもしれない。

知ることについては、絶えず内省的であるべきだが、懐疑の渦に飲み込まれてしまうことは一種の精神病的な状態を引き起こしかねない。そもそも、フーコーが指摘しているように、何が正しいかに関しては、社会による目には見えないメタパワーが働いているのであるから、知の正しさを検証するよりも先に、そうしたメタパワーの所在を突き止め、それがどのような影響を私たちにもたらしているのかを分析したほうが良いように思えてくる。

今日は改めてピアジェの思想に触れていたのだが、ピアジェは発達の根幹に2つの現象を見出している。1つは差異化と統合化に代表される「組織化」という現象であり、もう1つは様々な環境やコ

ンテキストに対する「適応」という現象である。後者の概念について言えば、それはカート・フィッシャーの「文脈依存性(コンテキスト依存性)」という概念に関係しているものだが、その方向で考えを広げていくのではなく、社会課題に自覚的な実践者との関係性で適応という概念を考えていた。

発達というのは、ある既存のコンテキストに適応していくという側面があり、それは差異化を経た上での統合化を意味している。自己とコンテキストの差異化や、これまで自分が立脚していた既存のコンテキストと新しいコンテキストの差異化が行われた後に新しいコンテキストに適応するという統合化のプロセスが始まる。

このプロセスは、自己が様々なコンテキストに開かれ続けている限りは永遠に繰り返されるものなのだろう。コンテキストと自己、及び新旧のコンテキストを差異化する際に、おそらくコンテキストに固有の課題を認識させられることが要求され、この発達プロセスを繰り返していくことを通じて、やはり社会の大きな構造的な課題にいつしか自覚的になる時がやってくるのではないかと思う。この論点に関係することは、本日の日記の中でも書き留めていた。同種の論点について何度も書いている自分を見ていると、今の自分は発達の社会実践的な側面とその実践に強く関心があるようだと思われる。フローニンゲン:2020/7/6(月)19:39

5968. 芸術と社会の対話的關係性の構築に向けて

時刻は午前6時を迎えた。ここ数日間は朝日を拝むことができなかったが、今日は優しい朝日が赤レンガの家々の屋根に降り注いでいる。この光景を眺めると、心が自ずから安らいでいく。今はそよ風も吹いておらず、無風の世界の中に世界がすっぽりと収まっている感じである。そのような世界を眺めていると、少しばかりそよ風が吹いた。

今日は昼前に小雨が少しばかり降るようだが、昼過ぎにはそれが止み、1日を通して天気が良いようだ。気温に関しては依然として低く、最高気温は17度、最低気温は9度とのことである。昨日改めて7月と8月の月間天気予報を確認したところ、現時点においては、どちらの月においても25度を超えるような日はほとんどないようだ。毎年8月には30度を越す暑い日が数日ほどあるのだが、今年はどうもそうした日がないらしい。今年は本当に冷夏である。

昨夜、少しばかりハーバマスの美学思想ないしは芸術論について調べていた。関心を引く論文を1つ見つけ、早速それを読み、同時に興味深い書籍を1冊ほど見つけた。その書籍は、“Habermas and Aesthetics: The Limits of Communicative Reason” というタイトルのものであり、こちらは来月の頭に書籍を一括注文する際に購入しようと思う。

ハーバマスの思想の中で大いに共感しているのは、芸術と社会を媒介させる思想である。とりわけ、美的な「公共圏 (public sphere)」を創出し、その空間を通じて人々が対話によって芸術の力を社会に発揮していくという発想は、まさに自分がおぼろげながら持っていたものである。

ドイツの詩人のハインリヒ・ハイネはかつて、芸術家を知識人(単に情報的な知識を多く持っている人ではなく、叡智を持って人々を啓蒙する人)としてみなし、知識人の役割は、芸術や学問の世界に閉じられているものを多くの人に開くことであるとみなした。そしてそもそもの芸術や学問は、人々に開くための叡智を絶えず生成する必要があるということを指摘していた。またハイネは、芸術や学問が生み出す意味の資源は、政治的な意思形成の資源へ転換しうるということを指摘し、知識人としての芸術家はその媒介役を果たすことができれば、開かれた叡智をもとにコミュニケーションが生まれ、公共圏が形成されていくであろうということを述べている。

人々同士のコミュニケーションによって成り立つ公共圏の確立は、一部の知識人による芸術の政治利用(例:ナチスが芸術音楽を宣伝利用した事例)に対する牽制役の役割を担うことにもつながるであろうから、芸術を通じた社会形成の実現の道を見出しうる。ハーバマスと同様に、今の私は単に作品を解釈するような意味での美学に関心があるのではなく、社会と繋がり、社会課題の解決に向けた実践的な美学に関心がある。まだ執筆には取り掛かっていないが、近いうちに執筆したいと思っている実践霊性学と実践美学に焦点を当てた書籍は、このあたりのテーマにも触れたいと思う。フローニンゲン:2020/7/7(火)06:21

5969. 今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前6時半に近づいている。今は再びそよ風が止み、無風の静けさが辺りに滲み出している。朝日の光は優しく、フローニンゲンの街全体を撫でるようにして包み込んでいる。この街も光に祝福された街であったか。遠く離れた故郷を思い出しながら、そのようなことを思う。

今日も引き続き、創作活動と読書に打ち込んでいく。今、自分の中で新たな探究テーマが形成され、それに関係する書籍を大量に読み進めている。それらのほとんどは思想書であり、第一線級の哲学者・思想家と対話をするような形で日々が過ぎていく。哲学者や思想家との対話は、これまでの8年間にも行ってきたことであったが、今は以前にも増して対話の量と質が増大しているように感じる。

今週末の金曜日にはオンライン対談があり、対談は生き物であるという性質上、その対談の中でどのような話になるか分からないが、おそらく今自分が読み進めている書籍に影響を受けたことを話すのではないかと思う。それも含めて当日の対談が楽しみであり、当日までにまだ時間があるので、引き続き書物を読み進めていこう。

今朝方は2つほど印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、海の家がある海岸を歩いていた。そこは実家の目の前の海のようにも見えるし、若干違うようにも見えた。いずれにせよ、私の心は平穏であり、海の広大さと心地良さを感じながら歩いていた。

海岸沿いに植えられた松林の一角に、カフェのようなお店を見つけた。それは一夏の期間だけそこにお店を開いているようだった。そのカフェは木でできており、外観はとてもお洒落だった。早速中に入ってコーヒーか何かを注文しようと思ったところ、店の入り口には少しばかり列ができていた。それが大した列ではないことはホッと、人気のお店なのだということがすぐにわかった。

店の入り口付近でぼんやりと佇んで待っていると、私に声をかけてくる女性がいた。声の方を振り返ると、若くて綺麗な外国人の女性が笑顔でそこに立っていた。その女性と2、3会話を交わすと、どういわけか、その女性は私の方に近寄ってきて、私の手を取った。彼女と私は初対面であり、まだ会話を数回ほどしか交わしてないのだが、まるで交際をしているような間柄にすぐさまなった。

彼女と手をつないで店に入ろうとすると、そこに大学時代のサークルの友人が2人いて、私が外国人の女性を連れて店に入ろうとしていることを少し驚いていた。店の中に入った瞬間に、その女性と私の体は店になく、欧州のどこかの国の美術館の前にいた。そこは巨大な美術館であり、パリのルーブル美術館やロンドンの大英博物館が発する雰囲気と同じものを持っていた。美術館に入ろうとしたところ、彼女は私の手を振り払い、先に進んで行った。先ほどまでやたらと私の近くにいたの

で一体何があったのだろうと思ったが、私は特に気にせず自分のペースで美術館を巡って行った。

すると、美術館のグッズショップに辿り着き、そこでお土産に何か購入しようかと思っ
て色々と眺めていると、遠くの物陰で、前職時代のボスと先ほどの外国人の女性が日本語で話をしている声が聞こえた。どうやらボスは、何らかの目的でその女性を私のところに送り出したことを知った。2人のひそひそ話に耳を傾けていると、どうやら私の実家の近くにある島で財宝や天然資源が見つかり、それを狙って、外国人の要人たちがそこに集まってきているようだった。ボスは彼らとコンタクトを取り、新たなビジネスに着手することを考えているようだった。

そこからもしばらく2人のやり取りは続き、やり取りが終わると、再び外国人の女性が私のところに戻ってきた。私は気づかれぬようにしようとしたが、2人の会話を聞いた後、彼女に対する態度がやはり少し変わってしまったようだった。そこからは一緒に美術館を巡ったが、美術館を出ようとしたときに、前職時代のボスが姿を現し、事情を説明してくれた。私はすでに事情を知っていたが、初めてそれを聞くかのように話を聞き、実家近くにあるその島について、自分が知っていることをボスに話した。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は300人以上入る大きなセミナールームにいた。セミナールームは静かではあったが、どこか不思議な熱気があった。若い女性が壇上でレクチャーをしていて、途中で突然私が指名された。この15年間、私が毎日午後に仮眠を取っていることについてシェアをして欲しいとのことだった。仮眠の効能についてシェアをすると、その講師は大いに興味しており、私の話到场全体も盛り上がっていた。その後、セミナールームの一番左の列の一番後ろの席に座っているDJ風の男性が、映像を用いて何かをシェアし始めた。それに対しても会場は盛り上がった。

私たち2人のそれぞれは、会場から300以上の「いいね」をもらえたらしく、後方に座っていた友人がそれを教えてくれた。するとそこで私の体は、前職時代のオフィスにあった。ポジションとして2つ上の女性の上司と、年次が上の女性の先輩が、私に仕事を依頼してきた。その時の私はいくつか仕事を掛け持ちしており、依頼された仕事については、インド人の同僚と一緒に取り組むことにした。どういわけか私は、やはりこの会社で働くことは自分の能力を最大限に発揮することにつながらな

いという考えが芽生え、休憩がてらトイレに行こうと思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：
2020/7/7(火)06:51

5970. 学習・発達と感情的側面: 発達のエルゴード性と非エルゴード性

時刻は午後2時半を迎えた。先ほど仮眠から目覚めたのだが、仮眠中のビジョンの中で、人間の可能性についての自分の考えを誰かに話していた。その時には、ちょうどまた新しい考えが自分の中に芽生えており、それを近くにいた誰かに話して、意見をもらいたかったようなのだ。

今日は午前中に、過去に届けられた作曲理論の2冊の書籍がまたしてもイギリスから配達されてきた。改めて確認したが、それらはすでに持っているものと同じであり、どうしてこのようなことが起こったのかと不思議に思っていた。イギリスの書店に送り返すのは面倒なので、それはいつもお世話になっている街の中心部の古書店ISISに寄付をしようかと思う。ちょうど店主のセオさんと久しぶりに話したいという思いもあるため、アテネ旅行から帰ってきてからでもまた店に足を運んでみよう。

このところは、自分の中でまたしても発達の分岐点 (bifurcation point) を通り抜け、新たな関心領域への探索と関与が始まったようである。今向かっている先は、実践霊性学と実践美学であり、それらの領域に付随する形で様々なことを学んでいる。

発達の分岐点に到達し、そこを通り抜けていくにあたり、自分の内側にあった何か強い思いのようなものが大切だったように思う。まさに、カート・フィッシャー教授の教え子かつ協同研究者でもあったマリー・イモーディノ=ヤング博士は、発達における感情の大切さを指摘しており、“We feel, therefore we learn”という言葉を残している。その言葉はとても示唆深いように思う。学習や発達において感情の側面が大切というのは当たり前といえば当たり前なのだが、それは忘れがちな側面であり、そうした側面を科学的に探究していったイモーディノ=ヤング博士の功績は大きい。

感情というのは、とりわけ学習や発達の潤滑油として働くだけではなく、それらの根源だと言ってもいいかもしれない。本来、豊かな感情を持つ生き物である私たちは、どこかそうした感情的な側面を忘れてしまいがちであり—先日の日記の考え方に基づけば、忘れてしまっているだけではなく、忘れさせられている—、学習や発達に必要な不可欠な感情を抑圧してしまう傾向にある。感情的側

面を取り戻し、感情世界を豊かにしていくことは、人間性の回復と涵養につながり、学習や発達を支える資源になる。

先ほど、発達のエルゴード性(ergodicity)と非エルゴード性(non-ergodicity)について考えていた。前者の例として言えば、発達の構造的な特性が順を追って紐解かれてプロセスは、一個人に当てはまるものではなく、広く集団にも当てはまるためという現象がある。一方後者は、発達現象に関して集団で発見されたことが必ずしも個人に当てはまらない現象を指す。

発達のマクロなプロセスはエルゴード的であったとしても、発達のミクロな軌跡は非エルゴード的なのだ。そのようなことを考えながら、フローニンゲン大学に在籍していた時の研究は、1年目においては発達の非エルゴード性に着目し、2年目においてはあえて集合の発達プロセスの中にあるエルゴード性を研究していたことを思い出した。ここでも対極を行き来している自分がいることに気づく。昨夜も、発達研究ではなく、自分の過去10年間の学習や実践を俯瞰的に振り返り、そこにも対極的な動きがあることを見出していた。今、冒頭で述べたように、そうした対極的な運動がまた新しい探究・実践領域を切り開こうとしている。フローニンゲン:2020/7/7(火) 14:57

5971. 自分の名前に導かれて:自己涵養的・社会実践的なりテラシーの未熟さ

時刻は午後7時を迎えた。今のフローニンゲン上空は雲に覆われていて、今日は夕日を拝むことはできない。振り返ってみれば、今日もまたとても肌寒1日であったが、午後にはジョギングがてら街の中心部のオーガニックスーパーに出かけた。その帰り道にふと、ロイ・バスターの批判的实在論とインテグラル理論に関するイメージが浮かび上がった。それは、それぞれの存在者に居場所を与え、それを通じて一枚の大きな絵を描いていくイメージだった。

2つのメタ理論は随分と違う内容を持っているが、そのようなイメージは共通して存在しているように思える。体を動かすと、思考の整理だけではなく、イメージの世界でも何かが整理され、1つのまとまったイメージが浮かび上がってくるようだ。

買い物に出かける前に、ジョン・ロールズの道徳思想に言及した書籍を読んでいた。発達というものが全ての人の幸福に資するものであるかどうかを絶えず考えること。ジョン・ロールズの道徳思想において、それと同じような道徳原則が言及されていた。性別や生い立ちなどに関係なく、全ての人

の立場から発達という言葉の意味を考えることができるか。ロールズが指摘するように、私たちの観点は絶えず「無知のベール」で覆われており、どこか特定の立場だけに立脚して物事を考えてしまう。

発達という現象について議論する際には、絶えずそれを全ての人の観点で捉えていくことが重要だろう。そのようなことを考えていると、自分の名前に「平等」の「平」という文字が当てられている意味について考え始めた。今の私は、社会正義や道徳を含めた「善」にも関心を持ち始めているようなのだ。それはようやく自分の名前に含まれた意味を通じて生き始めたことを意味しているのだろうか。また偶然にも、美への関心が高まっている時に、名前に「美」が付く方と知り合うことができた。善と美。これまでの真の探究が分岐点を迎え、そこから善と美という2つの道が現れた。それら2つの道を辿りながら、再び自分は1つの道に還っていくのだろう。

その他にも今日は、日本人の名目識字率と日本語空間の地盤沈下について考えていた。日本人は世界で有数の識字率を持っているが、それはあくまでも名目的なものであり、自己を涵養し、社会の課題と向き合うために必要なリテラシーは低いのではないかと思われる。言い換えれば、情報消費的リテラシーは高いが、自己涵養的・社会的実践的なリテラシーが低いと言えるだろうか。

また、日本の食に関して言えば、日本は有数の農薬大国かつ食品添加物大国であり、その傾向は情報空間においても見て取れるように思う。「悪貨は良貨を駆逐する」という言葉のように、毎年日本に一時帰国した際に大型書店に足を運ぶと、悪書が良書を駆逐しているような状況が進行しているように思えてしまう。もちろん、良書は引き続き存在しているのだが、悪書の存在がますますと幅を利かせているような状況が見える。物理的次元においては発癌性の検証は比較的容易かもしれないが、目には見えない情報次元においては知的発癌性を検証することは難しいのかもしれない。いずれにせよ、知的発癌性物質を含むような書籍の蔓延と、自己涵養的・社会的実践的なリテラシーの未成熟な状況はひどく心配になる。フローニンゲン:2020/7/7(火)19:36

5972. 自由と発達

時刻は午前6時を迎えた。今朝も空が雲に覆われていて、朝日を拝むことができない。気温はとても低く、肌寒さを感じる。

今日は昼頃に少しばかり小雨が降るようだ。明日と明後日はほぼ1日中雨が降るようなので、昨日の段階で買い物を終えていて良かったと思う。

今日は、哲学者のザカリー・スタインの書籍を読み返そうと思う。具体的には、“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”という書籍の再読を行う。スタインは一連の仕事の中でいくつもの重要な指摘を行っているのだが、昨日はふと、自由を与えることが不健全に働きうる場合について考えていた。自由を与えられた者が将来のより大きな自由を得ることができるのかという点は非常に重要であり、仮にそうでなければ、今この瞬間の目先の自由ではなく、将来のより大きな自由に向かってその瞬間の自由を制限した方がいい場合がある。

例えば、子供に自由を与え、なんでも学んでいいと述べる形で学習の全てを子供に委ねた場合、発達段階的に子供は将来どのような形で自分の能力を発揮していくのかを見通すことができず、また社会の中で生きていく際に必要となる能力や学習項目が何なのかの判断は難しい。そうした中であって、子供たちに今この瞬間の目先の自由を与えることが、時に彼らの将来のより大きな自由を制限する可能性があることを認識しておく必要があるだろう。

仮に子供がその瞬間の衝動的な思いから、何も学ばなくていい自由を選択させてしまうことは、彼らの将来の可能性を大きく制限してしまうことにつながりうる。実際に、アメリカでは一昔前にフリースクール運動が起こったが、そこでは子供たちに自由を与えて野放しにすることによって、結果として子供たちは学習を放棄してしまい、それが彼らの将来の自由と可能性を制限してしまった。この一例をもって、教育哲学者のジョン・デューイも放任的な自由を与えることの問題を指摘していた。

小さな例としては、算数を学びたくないからといってそれを学ぶことをしない自由を行使させた場合、足し算・引き算ができないことがこの社会の中で生きていく上では大きな足かせとなったり、往々にしてそうした計算ができないことは社会的な不利益を被ることになるだろう。

スタインも指摘するように、教育上における自由というのは、決して放任的な自由を与えることではなく、子供たちが将来より大きな自由を得られるようにするものでなければならず、そして何よりも彼らの可能性を最大限に引き出すものであるべきである。そうした自由を与えられる存在を、スタイン

は「教育的権威 (teachery authority)」と述べている。それは専横的・強圧的な権威ではなく、子供たちの未熟な判断能力を補完する役割を担い、彼らが将来より大きな自由を獲得し、彼らが自分の可能性を最大限に引き出すことを導いていく存在のことを指す。そうした存在がないままに、放任的な自由を与えても人は発達していかない。仮に発達が実現されたとしても、それは往々にして自由や可能性がひどく制限された形の発達になってしまうだろう。学習や発達を健全に進めていくためには、放任的な自由ではなく、真に学習や発達を導いてくれる教育的権威の存在と彼らの支援が必要なのだということを改めて考えていた。

今日もいつものように、読書と創作活動に旺盛に取り組んでいこうと思う。それらの活動を通じて得られた事柄を何かしらの形にしていくことが自分に与えられた1つの役割であることを忘れないようにする。フローニンゲン:2020/7/8(水)06:28

5973. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。今、1羽の小鳥が鳴き声を上げた。数週間前に暖かい日が続いていた時は、小鳥たちの鳴き声も元気があったのだが、ここのところは朝が寒いので、彼らの鳴き声にはあまり元気がないように思える。というよりも、ここ数日間彼らの鳴き声を聞いていなかったとすら思う。今年は冷夏であるとしみじみ思う。

それではいつものように、今朝方の夢について振り返り、その後、本日の創作活動に取り掛かりたい。夢の中で私は、過去に卒業した日本の大学にもう一度入学しようと思っていた。随分と前にその大学を卒業していたのだが、改めて母校で学びたいことがあり、再度受験をしようと思った。自分としては随分と勉強をしたのだが、当日の英語と数学の入試問題が思ったように解けず、結局不合格になった。その不合格を受けて、後期日程としてはなぜか東京大学を受けることにしたのだが、後期日程の難易度や倍率を考えると、東大を後期日程で受験するというのはあまり得策ではなく、そもそもその大学には学びたいものが学べるような環境はなかった。とりあえず、学校の定期テストを受けるような感覚で1週間ほど対策をし、実際の試験ではかなり点数が取れたように思えたが、案の定不合格であった。結局、私は国立大学よりも先に受けた私立の慶應大学に進学することにした。ちょうど私はどこかの大学の講演ホールにいて、周りには以前協働していた方々が何名かいた。その方たちに大学入試の結果について報告をしたところ、第一志望にしていた大学に入学で

きなかったことを気にしてか、皆さんあまり何も言わず、反応に乏しかった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は小中学校時代の友人たちと一緒にテニスコートにいた。ここでは1人の親友(YU)と誰かがラリーをしていた。私は、別の親友(HO)とコート脇で話をしながらコート上のラリーを眺めていた。すると、横にいた親友の彼が突然、幼少時代の頃に流行っていたアニメのテーマソングを歌い始めた。するとそれに続く形で、近くにいた女性友達(NI)もその歌を口ずさみ始めた。彼女の歌はとても上手く、彼女もそのアニメを見ていたのかと妙に感心した。

しばらくして、コート上でラリーをしていた親友の母がコート脇に現れた。見ると、顔立ちが少し変わっているようであり、どこかインド人女性のように見えた。すると、親友の母が突然昔話を始め、生まれたのはインドとのことだった。インドから日本の大学に留学してきたときに、大学内でストーカー行為に遭ったらしく、学内でストーカーに後をつけられていたときに、テニスコートに逃げ込み、そこでテニス部の人たちに助けってもらったそうだった。

そのようなエピソードを聞いていると、私の横には2人の女性友達(MH & EN)がいて、今から列車に乗って、中学校に戻ろうということになった。今いるテニスコートも実際に通っていた中学校のものだと思っていたのだが、2人が急いでいるような表情を浮かべていたので、私は何も聞かずに彼女たちについていくことにした。

駅のプラットフォームに到着すると、ちょうど列車がやってきた。それは寝台車のような大きな列車であり、友人の1人がもう1人の友人の定期券を預かっていたようだった。私はチケットを持っていないように思えたが、とりあえず列車に乗ることにした。すると、私たちの目の前には、中学校時代にお世話になっていた部活の顧問の先生がいて、先生も学校に向かっているとのことだった。この時間帯の列車に乗れば、学校には余裕を持って到着できる。ところが私たちは、途中駅で少し用事があるようであり、学校に到着するのはギリギリになりそうだった。

気がつくと、私はもう学校の教室の中にいた。ちょうど先ほど列車の中で遭遇した先生の授業がこれからあるらしく、授業の開始前に私は、号令をかける役の友人に対して、声に魂を込める方法をそっと教えた。先生が教室に到着し、彼が号令をかけた瞬間に、クラスメートたちの行動がこれまで

とは異なり、号令のみならず彼らの行動にも魂が吹き込まれたようだった。それ見て先生は嬉しそうな表情を浮かべた。先生はちょっと実験的に、わざと「正座！」と述べると、椅子の上で本当に正坐をし始める生徒たちが現れた。私はそれを見て、言葉が持つ力の大きさを改めて面白いと思った。

しかし、先生の言葉に従わない生徒たちもいたのは確かである。友人の1人(KM)は、起立することなく、椅子に座ったまま眠っていた。彼は前の席に足を伸ばし、女子生徒の誰かが彼の足裏のツボをマッサージしているようだった。彼は気持ち良さそうに眠っていて、先生は彼が伸ばしている足の上に座ったが、彼はそれでもまだ眠り続けていた。それを見かねて先生は、彼の鼻の中に指を突っ込もうとしたが、それは少々汚いと思った。

すると、私の体は学校の野球グラウンドにあった。そこでは野球の試合が行われていて、私は生徒ながらも監督を務めていた。これから打席に立つのは、ちょうど先ほど眠りこけていた友人だった。私は彼にバントを要求したのだが、彼はバントは得意ではないと述べた。そこで私はハッとさせられ、これまでの私は1人1人の選手の個性を無視した形で試合を進めていたのではないかと気付かされたのである。

彼が打席に立つ前に、それでは何が得意なのかを聞いたところ、彼は思いっきりバットを振ることが得意だと述べたので、それじゃあ思いっきりバットを振っていこうと彼に伝えた。自分は監督でありながら、これまで彼の得意なことが何かを見落としていたことに愕然とし、ベンチに戻って頭を抱え、思わず涙した。そして、「監督って難しい…」と呟いた。私の両脇には野球部の友人(左にはTS、右にはYK)がいて、彼らは私をなだめてくれた。するとそこで再び私の体は瞬間移動し、学校の教室にあった。そこでは何か小テストのようなものが行われていて、私は他の生徒たちがテストに取り組むのを見守っていた。

野球部のある友人(RS)がテストの取り組んでいるときに、彼はテストで問われていたある人物(現実世界で最近知り合った知人)の下の名前の最後の漢字を間違えていた。彼はあまり勉強が得意ではなかったこともあり、半分の正答率を得たことは彼にとっても自信となったようであり、私も少しほっとした。フローニンゲン:2020/7/8(水)07:02

5974. 新たな眼差しで胸を高鳴らせて日々を生きること

時刻は気がつけば午後3時半を迎えていた。この日記を執筆したら、近所のスーパーに買い物に出かけようと思う。明日と明後日は雨のようなので、必要なものは今日購入しておこう。

先ほど、イギリスの経済地理学者のデイヴィッド・ハーヴェイの書籍“Limits to Capital (2006)”の中で興味深い指摘を見つけた。ハーヴェイは、現代の金融資本主義における問題解決の方法は、問題を根本から解決しようとしているのではなく、問題を拡散あるいは分散させるか、問題を単に別の場所に置き換える形で解決させようとする傾向にある、述べている。まさに私たちの家庭で出されるゴミに対して、そもそも根本からゴミが出ないような仕組みを作るのではなく、出されたゴミを拡散させたり、どこか別の場所に押し付けるかのような形で問題解決に当たる傾向にあるのがこの現代社会の特徴なのだろう。ここにも、問題を生み出す構造そのものへの眼差しの欠如と、そうした眼差しを育む仕組みや支援の欠如が見られ、はたまたそうした眼差しを抑圧するような風潮や仕組みがこの現代社会に蔓延っているのではないかと思う。

午後に仮眠を取って目覚めたときに、求める愛と与える愛について考えていた。本当の与える愛というのは、与えようという意思すら芽生えない形で発揮されるものなのだろう。愛を与えるという考えが芽生える隙もなく、愛を自発的に降り注いでいるというのが与える愛の本質にある。そのようなことを考えていた。

数日前の日記に、カート・フィッシャー教授の教え子かつ協同研究者でもあったマリー・イモーディノ＝ヤング博士の研究について言及していたように思う。“We feel, therefore we learn”という言葉を用い、学習や発達における感情が果たす役割についてそこで述べていた。

ふとしたご縁で最近知り合ったある方に成人発達理論という学問領域があることを伝えたところ、「新しい発見にドキドキしています」というメッセージをいただいた。このメッセージを受け取ってしばらくしたときに、思わずハッとさせられた。というのも、そこには学びや成長の本質が隠されているのではないかと思ったからである。日々私たちは、何かを学習する時や実践する時に、こうした胸が高鳴る気持ちを感じているだろうか？新しいことを学ぶ喜びや、自分や他者及びこの世界の新しい側面に気づく喜びを毎日感じているだろうか？もしこうした感情が芽生えないのであれば、それは

感情を持つという人間要件の大切な側面を失いつつあることの現れではないかと思う。またそれは、実りある学習や実践に従事していないことの現れではないかとも思う。

そのようなことを考えていると、監修させていただいた有冬典子さんの書籍『リーダーシップに出会う瞬間』の中に、「ワクワクは枠の外にある」という名言があったのを思い出した。毎日同じ枠の中になると、こうした胸の高鳴りを感じることはできないだろう。

人間性心理学を切り開いたアブラハム・マズローの研究で、真に自己実現を果たした人の特徴の1つに、この世界を絶えず新しい眼差しで見つめ、新たな発見に喜びを見出して毎日生きることができるといふものがある。発達理論の観点からさらに意味付けをしてみると、日々新たな眼差しを獲得するというのは、毎日死と再生を十全に行い、死を経て再生が実現されることによって新しい眼が生まれてくるのではないかと思えてくる。

『モモ』の作者であるミヒヤエル・エンデの父のエドガー・エンデはかつて、「夢の世界を訪れることは、死の世界の先取りである(夢を見ることは死という体験の先取りである)」という意味の言葉を残していた。日々夢の世界に足を運ぶ私たちは、本来小さな死を体験しているのである。そうしたことを考えてみると、自己実現を真に果たした人というのは、毎日十全に死に、十全に再生を遂げている人なのだろう。

与える愛を降り注ぎながら、善く美しく生きること。そして、日々十全に死と再生を繰り返していくことが、とても大切な生き方のように思えてくる。フローニンゲン:2020/7/8(水)15:43

5975. 現代を覆う全象限的な盲目病の治癒に向けて

時刻は午後7時を迎えた。今、穏やかな夕方の世界が広がっている。明日と明後日は雨とのことであるから、今日は夕方に近所のスーパーに買い物に出掛けた。今日はオーガニックのサツマイモを購入しようと思っていたのだが、それがいつもある場所に置かれていなく、店員に尋ねたところ、オーガニックのサツマイモはもう入荷しないとのことだった。これまでよく売れていただけに、なぜそれがもう入荷されなくなったのかの理由は不明であり、非常に残念だ。サツマイモの栄養素とは異なるが、今後は、以前食べていたオーガニックのブロッコリーをまた食べることにしたい。少しばかり

食生活の微調整が必要であり、サツマイモがもうその店に置かれなくなったことは、食生活を少し変える必要があることを私に知らせてくれたのかもしれない。

今日もまた、アートを核に据えた実践美学と実践霊性学を通じて、現代社会が共有するナラティブを変容させていくことはできないかを考えていた。現代社会に蔓延しているひどく限定的・部分的なナラティブに何らかの関与をしていきたいという思いが日に日に強まる。

現代は多くの情報が行き交っているが、それらの情報を俯瞰的に眺めた時、インテグラル理論で言えば、それらはある特定の象限にひどく偏っているように思える。当然ながら、この世界に広がっている情報を全て集めてくれば全象限的なものになるが、私たちの意識の段階や趣向性・志向性、さらには置かれている組織や社会の文化や制度によって、実際のところ私たちが得ることになる情報はとても偏りがあり、限定的なものなのだと思う。そうした状況が、多面的な盲目症状を引き起こしているのではないだろうか。つまり、視野が狭窄であることが、真善美の領域の全般にわたって無数の盲点を作り出しているのではないかということである。現代を覆う全象限的な盲目病の治癒に向けての自分なりの取り組みの方向性の一端が見えてきている。それをより明確にし、それを日々実際の行動を通じて実践していこう。

今日はこれから、もう1曲ほど曲を作りたい。このところは、過去に作った曲の原型モデルを活用して、夕食後にも曲を作っている。今この瞬間の自分の内側から湧き上がってくる感覚を音の形にし、それを通して自己を再度捉え直していくこと。1つの曲が生まれた前後では、もうそこにいる自分が異なる自分であるという認識。1つの曲を生み出すことは、死と再生をもたらす。それはマイクロな発達であるとも言える。

毎日少しずつ曲と絵を生み出し、毎日少しずつ日記を綴っていく。それらの自己表現的な創作活動はいずれも、小さな死と再生をもたらす発達の触媒作用がある。フローニンゲン:2020/7/8(水)
19:31

5976. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。今、小雨がパラついていて、今日は1日を通して雨が降るようだ。

小雨の中、小鳥たちが小さく鳴き声を上げている。その鳴き声に耳を澄ませて、心を落ち着かせてみる。平穏な心と今ここを感じることは、ほぼほぼ同義なのだとわかる。

今朝方も印象に残る夢を見ていた。それについて書き留めたら、早速今日の活動を開始していこう。

夢の中で私は、どこか見慣れぬ海岸にいた。波打ち際には獰猛な動物が5頭いて、そこから近くの海の中には2頭の人食いザメがいた。私の横には友人がいて、近くには5人ほど子供がいた。どうやら私たちは、2頭のサメと5頭の獰猛な動物がいる場所を通っていかなければならないようだった。しかし、そこを通過するのは1人でよく、誰か1人が通過すれば、あとは全員自動的に通過できるようになっていた。

5人の子供を砂浜に残し、友人と私は協力して、あれらの獰猛な動物たちの前を通過していこうと思った。まずは海の中に入り、サメの前を通過するために私たちは泳ぎ始めた。すると突然、その場は海ではなくプールに変わった。そのプールには水が数センチほどしか入っておらず、サメの姿も見当たらない。サメがどこに行ったのかを探していたところ、私の脳裏には、そう言えば先ほどまでプールに水がもっと入っていたときに、誰かがサメを捕まえ、サメの体の解体作業を行っていたことを思い出した。

すると、横にいた私の友人が2つの小さなパックを差し出した。それはスーパーで売られているもずくや納豆のパックぐらいの小さなものであり、中にはサメの脳髓が入っているようだった。1つのパックにはサメの脳髓が少しか入っていて、もう一方のパックにはサメの脳髓がぎゅうぎゅう詰めに入っていた。友人曰く、サメの珍味らしく、少し食べてみてはどうかと言われたが、私はそれを食べることをせず、パックを持ったままプールを後にしようとした。するとそこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は小中高時代の親友(SI)とランニングをしていた。ランニングの道のは長く、私たちは途中である建物の前に立ち寄り、1階のトイレに行ってそこで休憩を取ることにした。私はトイレの中には入ったが、特に用を足すことをせず、トイレの端に立っていて、その壁にもたれかかって休憩していた。すると、小中高時代の別の友人(HY)がトイレにやってきて、親友に何か励ましの声をかけていた。それは部活に関することのようにであり、どうやら親友は部活を続けるかどうか悩

んでいたらしかった。それに対して、トイレに入ってきた友人は彼を励ましていた。私は、彼らのやり取りに深い友情を見て取った。

私をもたれかかっている壁の左側には大きな窓があり、そこを開ければ外に出られるようになっていた。すると、そこからその親友の母親と弟が現れ、親友に何か声をかけていた。そこから親友と私たちは、再度ランニングを開始することにし、ゆっくりとではあるが着実にどこかに向かって走り始めた。

すると、私の体はどこか見慣れない小さな会議室の中にいた。そこには机と椅子が変わった形で配置されていた。また別の親友(NK)がその部屋にやってきて、私に相談事をもちかけてきた。話を聞くと、彼はどうやら言葉を通じて内面探求がしたいとのことだった。言葉を通じて自己を深めると、そしてそのプロセスを言葉の形として記録しておくことは大変素晴らしいと思ったので、私は彼にその方法と継続して実践するコツについて話をした。

すると再び私の体は別の場所にあった。そこは欧州のどこかの国のパブだった。そのパブは一風変わっていて、フットサルコートが店の中にあった。店内にはラテン系の音楽がかかっている、客もフットサルをしている人たちも、ラテン系の顔をしている人が多かった。ラテン系の音楽がサビに向かったところで、フットサルをしていたどちらかのチームがゴールを決めて、彼らの盛り上がりや曲の盛り上がり重なった。それを見計ってか、私の視界に入るところに座っていた白人の外国人が、別の大柄な白人男性の首を何度もナイフで斬りつけ始めた。私は思わず声を上げたが、時すでに遅しであり、ナイフで刺された大柄な男性はすぐに息を引き取り、男性を殺した男は店を後にした。

私は衝動的にその男を追いかけようとして店を飛び出した。すると、その場にはもうその男の姿はなかった。そこから私は歩き始め、程なくして日本のある大学の立派な校門に辿り着いた。門をくぐって校内に入ると、ちょうど女性警官がパトロールをしていて、私はその警官に先ほど目撃した事件について報告をした。最初その女性警官は、私が突然事件について話し始めたものだから、怪訝そうな目つきをしていたが、私が真剣に話をすることによって、事件について信じてもらえ、すぐに現場に他の警官たちと駆けつけるとのことだった。

今朝方はそのような夢を見ていた。あと1つぐらい夢の場面があったように思うが、それはもう記憶の彼方に飛んでいる。それが再び戻ってきて、形を変えて今夜の夢として現れるかもしれない。フ
ローニンゲン:2020/7/9(木)07:06

5977. シャドーワークの確かな進展:フラットランドの進行と一次元的人間の蔓延

時刻は午前9時を迎えようとしている。今、小雨が降っているのだが、それよりも何よりも、今日ほどにかく寒い。一瞬、暖房をつけようかと考えるほどだった。もう7月の第2週が終わろうとしているにもかかわらず。とりあえず今は長袖長ズボンを着て、靴下を履いて過ごしている。

早朝に、夢を書き出すことを長く続けていると、シャドーワークがゆっくりと着実に進んでいることを実感した。心の中で深い治癒が起こっていて、それが変容の後押しをしている。自分の夢を自ら綴っていくという実践は無理がなく進められるため、治癒と変容の速度も自分の内側のプロセスに合致したものなのだと思う。

昨夜も就寝前に、これから自分が見る夢が誰かと共有されている可能性について考えていた。現実世界の中の人と夢の世界の中でも会うことができる可能性についても思いを馳せていた。異なる人が同じ夢を共有するという。異なる人が同じ夢の世界の中で鉢合わせる。それらを考えるだけで、幾分胸が高鳴る自分がある。人間の想像力は無限であり、それは無限の創造力につながる。

先ほどトイレに向かう最中に、ケン・ウィルバーが提唱した「フラットランド」という概念と、ハーバート・マルクーゼが提唱した「一次元的人間」という概念の関係性について考えていた。2人の思想家の問題意識は多分に重なっているようだ。

マルクーゼは、理性の本質を「否定の力」とみなしており、それは大変興味深い。私たちは、改善されるべき現実の姿と、あるべき現実の姿を区別する形で理想の現実に向かっていくが、その際に否定の力としての理性を働かせ、そもそもそうした識別を行うことがまずは必要になる。しかしながら、現代社会の風潮と仕組みにより、人間からはそうした識別能力としての理性が剥奪され、人間は欲望や欲求を煽る画一的な社会に埋没していく。ウィルバーとマルクーゼの考え方の双方を用

いれば、社会としてはフラットランドが進行し、同時に個人としては一次元的な人間の生産が進んでいると言えるだろうか。

マルクーゼの分析は興味深く、一次元的な人間が誕生した背景には、科学技術や合理性のイデオロギーの信奉というフラットランド的価値観の蔓延と、そうした価値観と消費至上主義のイデオロギーを煽る広告宣伝を通じた大衆文化の醸成を挙げている。そしてそれらは、かつて金融資本主義の否定勢力として存在していた労働者階級すらも取り込んでしまい、現代は社会の変革が抑制され続けている状態にあると指摘している。

今、哲学者のザカリー・スタインの書籍を読み返しているのだが、彼自身が失読症を持っており、マイノリティーかつアウトサイダーとしてこの社会で長らく生きており、彼の問題意識の中には健全な批判の精神、すなわち否定の力が備わっている。マルクーゼも、フラットランド的な社会の変革においては、少数のアウトサイダーやマイノリティーが持つ否定の力が不可欠であると指摘しており、この点については共感の念を持つとともに、また色々と考えさせられることがある。フローニンゲン：
2020/7/9(木)09:10

5978. 本日の雑多な考え事

時刻は午後7時を迎えた。今日はとても寒い1日だったが、活動としてはいつも変わらずにとっても充実した1日だった。

午後に仮眠を取っていると、今日も短時間のうちに深い意識状態に降りていき、少しばかりビジョンを知覚していた。知覚していたビジョンについては覚えていないが、仮眠から目覚めた時に、新しい1日が始まったと勘違いした自分がそこにいた。それくらい回復力のある深い仮眠が取れており、それほどまでに深い意識状態に参入していた。目覚めてみると、激しい雨音が寝室の窓の外から聞こえてきた。

午後、自分の固有のシンボル創出能力とゲシュタルト生成能力が相まって、曲や絵が形になってくことにふと気づいた。曲や絵もそうした能力によって不可避的かつ必然的に生み出されてくる。抗いがたい力がそこに働いているようだ。そうした力に身を委ねる形で、自分の内的体験を観察する

というよりも、それを単に目撃しながら音や絵の形にしている自分がいることにも気づく。こうした意識のあり方で創作活動を続けていこう。それを通じて、自分の生命の真底部に流れている創造的な力と絶えず一致した形で日々を過ごしていこう。

己の言葉の限界が自らの認識の限界を作り、同時に己の想像力の限界が自らの認識の限界を作る。それを改めて思い、言葉と想像力を涵養していく必要性について考えていた。現代は、言葉と想像力の枯渇の時代なのかもしれない。社会で語られる物語はひどく一面的であり、歪曲されていて、幅も深さも無い。そしてそこには豊かな想像力が発揮されているような痕跡もない。この現代社会に蔓延する既存の物語を変容させていくためには、個人として、自分の言葉と想像力をたくましく育むことが第一に求められているように思える。

今日は教育哲学者のジョン・デューイの思想に触れていた。デューイの指摘の中で興味深かったのは、真の民主主義とは本質的に教育的なものである、という指摘である。民主主義とは、本来、絶えず新たな体験と学習に開かれたものなのだ。そのようなことを考えると、我が国は本当の意味での民主主義社会ではないように思えてくる。

そもそも、1人の人間として民主主義社会に参画するための素養が欠けており、それが教育によって適切に涵養されていないように見受けられる。素養の中でも重要なことは、言葉を通じて自己を表現する力と、自己を表現するだけでなく、他者と対話を通じて合意形成をなしていく力である。これら2つのどちらかではなくて、双方がなければ、デューイが述べるような真の民主主義が実現することはないだろう。自己表現力と対話力の不在は、民主主義の不在を示唆している。

夕方、文化は人を形成し、人は文化を形成するという点について考えていた。それらは双方向的なものである。その点について考えを巡らせていると、この現代社会に存在している私たち1人1人の行動が文化を作っているのだという認識を改めて持つことの大切さに至る。

今日の自分の一連の行動、そこには今この瞬間に行っている日記の執筆や、音楽や絵画の創作も含まれ、それらの行動は絶えず何かしらの形で現代社会に関わっているものであり、現代の文化を今その瞬間に形成していくことに参与していることを意味している。そのような認識を持って、明日からの1つ1つの行動を行っていく。フローニンゲン:2020/7/9(木)19:28

5979. 文明による抑圧とバイオパワーによる規定

時刻は午前6時半を迎えた。先ほどまで小雨が降っていたが、今はいったん雨が止んだ。今日は午前中いっぱい雨が降り、午後になると少し晴れ間が見えるようである。今日もまた肌寒さは変わらず、暖かい格好をして過ごそうと思う。

今日は昼前から、楽しみにしていたオンライン対談のイベントがある。先ほど申し込み状況を確認してみたところ、定員の300名に達しており、随分と多くの方に参加していただけるのだなと嬉しく思った。

対談相手を務めてくださる中土井僚さんとの対話は盛り上がるであろうことが予想されるが、どのような内容の話になるかは全く予想できない。予想できることと予想できないことが同居していることがまた、今日の対談の楽しみを押し上げている。

対談の開始まであと5時間ほどあり、それまでの時間はいつものように創作活動に充てたいと思う。直前には少しばかり心を落ち着けるような実戦でもしようかと思う。

ここ数日間は印象に残る夢を見ていたのだが、今朝方の夢はほとんど何も覚えていない。無意識の世界が随分と静かだった印象だ。

昨日もいつものように読書を行っていて、そこから得るものが多く、無意識にまたがる思考空間の中で整理が必要だと思っていて、いつもと同じように夢を見るかと思っていたのだが、そうではなかった。

寝る直前に、本日の対談に対する興奮があったことは確かであり、今日の対談がどのような方向で、そしてどのようなことが対話を通じて紡ぎ出されていくのかを非常に楽しみにしている自分がいた。そうした興奮によって、ひょっとしたら夢を見ることがなかったのかもしれない。

昨日は改めてフロイトの思想に触れていた。フロイトの洞察として見逃すことができないのは、人間の文明そのものが私たちの本能を本質的に抑圧しているというものである。この点については、ミシェル・フーコーが提唱した「バイオパワー(生権力)」という概念と合わせて色々と考えていた。

私たちの文明社会には、至る所で様々な形を伴ってバイオパワーが働いており、それは外部から私たちの行動や発想を規定する。それは物理的身体の次元で行動を規定することもあり、同時に、目には見えない精神の次元で私たちの発想を規定する。

フロイトの考え方と合わせて考えれば、それらは単に私たちの行動や発想を制限するだけではなく、感情を含め、私たちの行動や発想を抑圧するものとして働きうる。日々の自分の行動や発想を、目には見えないどのようなバイオパワーが規定しているのかということに自覚的になる必要がある。

そして、それらのバイオパワーが仮に私たちの自由を歪め、私たちの可能性を制限する形で働いているのであれば、そうしたバイオパワーを変容させていく取り組みに従事していくべきであろう。そのようなことを考えていた。フローニンゲン:2020/7/10(金)06:52

5980. 本日の中土井遼さんとの対談によって紐解いていただいたもの

つい先ほど、近所のスーパーから帰ってきた。その時に、気分転換として、いや内側に留まり続けているの1つの体験を味わうために、少しばかり近くの運河沿いをジョギングしていた。

買い物にいく前まで行っていたのは、アントレプレナーファクトリーさんの後援のもとに行かせていただいた、知人の中土井遼さんとの対談であった。この対談が自分にもたらしてくれたもの、気づかせてくれたものはあまりにも多く、ここで全てを書き切ることはできない。またそうしてしまうことで何か大切なものがこぼれ落ちてしまうような感覚もある。

対談の冒頭で中土井さんがおっしゃっていた、「何かが紐解かれていく場になれば」という言葉の通りのことが自分の中で起きた。今回、Zoomでの対談は自分にとって初めての体験であり、オンラインでの対談そのものも振り返れば3年前に一度行わせていただいたことがあるぐらいだ。そうしたことから、自分にとっても未知の体験をさせていただく場を与えていただいたことに本当に感謝している。

参加者の皆さんのコメントや質問を改めて眺めてみると、本日の対談の中で、私の説明不足の箇所が多々あったことに気づく。私は、分断化・矮小化されてしまった物語の蔓延について問題意識を持っており、何も真を司る領域の実践や物質的なものを蔑ろにしているわけではない。真の領域を司る物質そのもの及び客観的に目に見える形での種々の実践や取り組みを大切にしつつ、そうした真の領域にある存在をより深く認めることや実践をさらに深めていくことを行っていくのと同時に、「忘れてしまった」さらには「忘れさせられてしまった」善や美の領域にも認識の光を当て、それらの領域の実践に乗り出していく必要があるのではないかという問題意識を持っていた。

私が善や美の領域に光を当て、その領域を通じた実践をすることの大切さを伝えさせていただいた後に、対談相手の中土井さんから、「それらは自分を晒さざるを得ない感覚がありますね」という非常に洞察の深いコメントをいただいた。これに加えて、参加者のある方からのコメントにおいて、そ

れでは善や美に関する具体的な実践をどのように始めればいいのか？という問いをいただいた。これは秀逸な問いであり、それこそが今の私の最大の関心事項だと言っているかもしれない。中土井さんがご指摘してくださったように、これまで学習捨象・実践捨象の領域であった善や美の実践を始めることを唐突に提案しても、それは実効性に乏しいだろう。

おそらくそれは、海に一度も入ったことのない人に対して—さらには、これまで海が存在を知らなかった人に対して—、いきなり海に飛び込めと言っているようなものである。私はそこで、哲学者のヨルゲン・ハーバマスが提唱した「公共空間 (public sphere)」というものを私たちの社会の中に確立させていくことが先決なのではないかと考えている。言い換えるならば、いきなり善や美の領域に人々を投げ込むのではなく、善的・美的公共空間の確立を優先して行う必要があるのではないかとということである。もちろんそれは、引き続き真の領域の探究と実践を継続していく中で行っていくものであり、確かにそれは課題レベルが高いものかもしれない。

ここで仮に善や美の領域だけに着目してしまうこともまた、別種の視野狭窄である。中土井さんが挙げてくださった例で言えば、自然災害の場において、善や美を議論する前に、そもそも物質的な支援を最優先させる必要があることは間違いない。もし善や美だけに着目してしまい、例えば「信じれば救われる」という発想だけを提示するというのは、未熟な内面主義者や似非スピリチャリストの発想だと思う。そうした発想ではなくて、真の領域に立脚した支援を行いながらも、それを善や美の領域を考慮に入れながら行っていく必要があるのではないかという問題意識を持っている。例えば、被災地に物資を単に提供するのではなく、それは必ず善や美の領域を絡めた形で行えるはずであり、そうした真善美のどれも蔑ろにしない形の行動を行っていくことが大切なのではないだろうか。

そうしたことを考えながら、それでは善的・美的公共空間というものが何なのかについて改めて考えてみると、それはこれまで忘れていた・忘れさせられていた善や美に関するテーマやトピックについて、今の自分の立ち位置から安心して対話をすることができる物理的かつ精神的な対話空間として私は捉えている。前者は対話を提供する物理的な場所として顕現し、後者は対話を支えながらにしてそれを育む風土として顕現するだろう。

今自分が最大の関心を持っている探究・実践領域というのは実践美学(+実践倫理学)・実践霊性学とも呼べるようなものであり、前者は美学者の今道友信先生の思想やハーバマス及びイギリスの

哲学者ロイ・バスカーの思想を汲み取りながら、後者については本日の対談の中やコメントの中にあつたように、クリシュナムルティ、シュタイナー、鈴木大拙などの思想を汲み取ったものになるだろうと思われる。これまで探究していた成人発達理論・発達科学、そしてインテグラル理論を超えて含む形で、それらの新たな領域の探究と実践を開始し、真善美のどの領域も蔑ろにしない公共空間の創出に向けた取り組みをしていこうと思う。

本日の中土井さんとの対話は、ここからまた自分が新たな探究・実践領域に乗り出していくことの後押しをしてくださったものであり、それに対する感謝の念と、同時に、本日まで参加いただいた数多くの方からのコメントや質問による刺激と啓発に大変感謝している。フローニンゲン:2020/7/10(金)
15:39

【追記】

実はこれまで一度もしたことがなかったのだが、私は何かに促されるかのように、そして導かれるように、今回のオンライン対談イベントに両親を招待していた。対談の最中に、両親の姿がちらりと目に入り、深い安心感のようなものを感じた。また、父と母が交代交代に抱きかかえていた愛犬の姿を見た時に、そこに愛犬の命の温もりのようなものを感じた。日本とオランダで遠く離れていても、そしてオンライン空間を隔てたものであったとしても、命ある存在者に流れる固有の温もりと固有の基底価値(ground value)を改めて実感し、それらを大切にしていくことの重要性を改めて思った。